いのちを大切にする心を育む「心を動かす体験」

～ 子どもと保護者と地域と教師とみんなでつながり育ちあおう ～

相模原市立ふじの幼稚園　**大塚　郷子**

Ⅰ　はじめに

相模原市緑区の片隅に位置するふじの幼稚園は、山々に囲まれた自然豊かな地域にある。本園では、自然環境を活かし、地域力を活用し、子どもたちが夢中になって遊べる環境構成を工夫しながら、豊かな心とたくましく生きる力を身につけることができるように取り組んできた。

大震災が起きて、改めて生きることの尊さ、いのちの大切さを感じ、幼児期にしっかり「生きる力」の基礎が育成できるように様々な体験を積み重ねることができる環境構成を考えていこうと職員で話し合った。そんなおり、父親が自らいのちを絶ってしまったという臨床心理士の話を伺った。どんなに辛いことに直面しても「自分でいのちを絶つということを選択肢に入れてはならない。」と思った。そして私たち教師は子どもたちに「いのちを大切にすること」を伝えていかなければならないという思いを強くした。そこで「いのちを大切にする心を育む」を重点目標とし、どのような環境を構成したらよいか試行錯誤しながら取り組んでいる。

Ⅱ　研究の方法と取り組み

研究を進めていくにあたり「いのちを大切にする心」はどうしたら育むことができるかを職員で話し合った。まず、今ある園の物的環境を見直し、それを活かしながらいのちを大切にすることを子どもたちに伝えていきたいと考えた。さらに、教師と子どもたちだけではなく、保護者や地域の方にも呼びかけ、みんなで育ちあえるような取り組みを目指すことにした。

１　「いのちを大切にする心」とは

～心の育ちに着目してみる～

いのちを大切にする心を育むには、自分のことを大切にできること、友だちや家族を大切にできること、優しい気持ちや思いやりをもつこと、自分で考え、判断し、行動できることが大切だと考えた。一人ひとりが愛されていることやかけがえのない存在であることを感じ、自己肯定感がもてるような環境づくりが必要である。

２　「いのちを大切にする心」を育むために

～物的環境の見直し～

園では小動物を飼っているが、子どもたちが愛情をもってかかわれるようにするためにはどうしたらよいか。育てている植物や野菜にどのくらい興味や関心をもっているか。子どもたちの心に届く小動物や植物などとふれあえる環境づくりをする。

３　「いのちを大切にする心」を育むために

～絵本とのかかわり～

本園の特色となっている読書活動をとおして、友だちや家族を大切にする気持ちや優しさ、思いやることの大切さを子どもたちに伝える環境を整える。

Ⅲ　実践内容

１　物的環境の見直し

（１）小動物（金魚・ザリガニ・クワガタ・サワガニ・あおむしなど）の大集合

それぞれのクラスで飼っていた小動物をみんなが見ることができたり、世話をすることができたりするように、幼稚園の中心にある玄関ホールに小動物コーナーを作り、大集合させた。すると部屋で飼っているときより、小動物を見ている子があきらかに増えた。見ているときも世話をするときも学年を超えた子どもどうしのかかわりが多く見られるようになった。

（年少児と年中児がザリガニを見ているところ）

園開放を実施しているので未就園児が遊びにくることも多い。その親子も興味を示してしばらくこのコーナーで楽しむ姿が見られるようになった。また、地域の方が園の取り組みを知り、めだかを連れて来てくださった。遊びに来た小学生が授業で学習しためだかの飼い方を子どもたちに教えてくれた。夏休みには、水槽の掃除を手伝いに来てくれた小学生もいた。

《子どものつぶやき》（年少児３歳）

～水槽で泳ぐ三匹の金魚を見ながら～

「これはお父さん金魚。あれがお母さん金魚。こっちがぼく金魚なんだよ。」

入園当初、発音があいまいであまりしゃべろうとしなかったＡ児。たどたどしい話し方ではあったが、この説明は何日も続いた。大きさの違いがわかっているので、いつも同じ金魚をちゃんと指差している。えさやりも忘れない。数ヶ月たった今も時々思い出したように私を呼んで話してくれる。今では発音もしっかりし、聞き取りやすくなった。感性も豊かになり、感じたことを言葉で表現できるようになった。

＜考察＞

みんなが目にしやすい場所に小動物のコーナーを作ったことで、園児はもちろん、未就園児の親子や園を訪ねてくださった方にも興味をもっていただくことができた。地域の方や小学生とつながりをもつきっかけとなった。家庭からは「幼稚園でいのちを大切に、とはたらきかけていることで、身近な虫の扱いが変わった。」「生き物は大切にするんだよ、と子どもに言われ、はっとした。」という声が届けられた。

水槽や飼育ケースなどの置き場所を変えたことがきっかけとなり生き物に対する興味や関心をもつことができた。身近な環境を見直すことの大切さをあらためて感じた。

（２）「みみちゃん広場をつくろう」

（人間なら８２歳というううさぎのみみちゃん）

本園には、みみちゃんと名づけられたうさぎが一羽いる。年長児が当番制でうさぎ小屋の掃除とえさやりをしていた。三学期になると年中児へとその当番が引き継がれている。うさぎはずっと小さな小屋の中に入れたままである。これでいいのだろうか。もっとうさぎが過ごしやすい環境、もっと子どもたちがうさぎとふれあえる環境をつくりたいと思っ

た。この思いを年長児に投げかけてみた。

みみちゃんはずっと小屋の中に入ったままでいいのかな？

「みみちゃんが外に出られるようにしてあげようよ」
「外に出したら逃げちゃうよ」
「逃げないようにすればいいじゃん」

逃げないようにするためには、どうしたらいいと思う？

「大きな箱があればいいよ」
「囲いがあれば平気だよ」

囲いならサークルを作った古いパーツが残っている。それを活用してみよう。中庭のコンクリートの壁を利用して広場となる空間が作れそうだ。裏の倉庫からみんなで運んで組み立てる。

（広場の囲い建設中）

この広場に何があったら、みみちゃんは喜ぶだろう

「みみちゃんの好きな食べ物」
「みみちゃんのぶらんこ」
「みみちゃんのお家は原っぱじゃない？」
「ここは、硬くて原っぱになんないよ」
「じゃあ、やわらかくしたら」
「水まく？」
「土を掘ったほうがいいんじゃない」

中庭は硬い地面だった。年長児が知恵を出し合い、みんなで耕すことになった。

（しろつめ草の種まき）

子どもたちの力ではどうにもならないくらい硬かったので、教師はもちろん通園バスの運転士さんの力も借りて耕した。そして、みみちゃんの好きなしろつめ草の種を蒔いたり、たんぽぽを移植したりすることにした。

「あっ、芽が出た！」芽が出ると歓声があがった。日増しにしろつめ草はのびて緑の広場に変身した。みみちゃんを外に出した。長年小さな小屋に入っていたみみちゃんは、広場の隅に行って動かないことが多かった。そしてうさぎを抱っこする子どもたちもぎこちなかった。しばらくすると、みみちゃんとおいかけっこをしている子どもたちの姿や抱っこされて気持ちよさそうなみみちゃんの姿がみられるようになった。

（みみちゃんと遊んでいる子どもたち）

うさぎ小屋は、子どもたちの目線に合わせて作られていたため、うさぎが自分で出入りできない状態だった。

みみちゃんが自分でお家から出たり入ったりできるといいね

「滑り台があるといいんじゃない」

「階段を作ってあげようよ」

板と滑り止めになる角材を探してきた。子どもたちが金槌で板に角材を打ちつけた。

（うさぎ小屋の階段作り）

いつも物静かで控えめなB児がいつになく積極的にかかわってきた。その腕前はなかなかのもので周囲の子どもたちからも教師からも思わず「上手！」と声がこぼれた。おかげで素敵な階段ができあがり、みみちゃんは自由に出入りができるようになった。そして、B児はこれを機会に元気パワーが顔を出した。

（みみちゃん広場完成！）

＜考察＞

教師の言葉がけをきっかけに子どもたちがうさぎに興味や関心をもつようになった。うさぎにとっても、優しい環境をつくることができた。一生懸命考えて、行動したことにより、少しずつ変化していくみみちゃん広場にたくさんの子どもたちが関心をもつことができた。きっと喜んでいると思われるうさぎに親しみを感じ、子どもたちは誰かのために自分ができることをする喜びを感じられたと思われる。そこには思いやりの気持ちや優しさが育っているのではないか。

B児はその後の遊びや人とのかかわりに変化をみせた。笑顔が増え、自分から話をするようになり、友だちとふざけあう姿が見られるようになった。この活動（階段作り）の中で自己発揮ができ、みんなに自分のよさを認められ、自信をもつことができたのだろう。

家庭にこのことを伝えると、B児の祖父は大工仕事が得意で金槌を使った経験があったことがわかった。「経験するって、大事なんですね。」と保護者も喜んでいた。家庭と連絡を取り合い、子どもの姿を伝え合い共通理解していくことは、大切なことである。

２　絵本とのかかわり

（１）全園児の保護者の読み聞かせ活動

本園は読書活動が活発である。五年前に図書館ボランティア制度を立ち上げ、子どもたちが絵本に親しむ環境をつくってきた。図書室の環境整備や絵本の貸し出し、読み聞かせなどの活動を行っている。子どもたちがゆっくり絵本を読むことができるこの空間は、子どもたちが「えほんのくに」と名づけて親しんでいる。

（えほんのくにで絵本を読んでいる子どもたち）

また、図書館ボランティアとして活動している保護者の交流の場、幼稚園をより理解する場となっている。卒園した図書館ボランテ

（図書館ボランティアによる読み聞かせ）

ィアの方が訪ねてくれることもあり、保護者にとっても「この空間はとても落ち着ける場所」となっていると話してくれた。

図書館ボランティアの中から生まれた「わたぼうし」というグループは、パネルシアターや絵本の読み聞かせをふじの幼稚園だけでなく、地域の学校や保育園などにもその活動の場を広げている。

（おはなしの会で演じているわたぼうしさん）

保護者会活動のひとつとして、読み聞かせ活動が定着している。保護者が全員年に一度、読みきかせを行っている。そこで、いのちを大切にする心を育むことを意識して絵本を選んでいただき、選んだ理由を聞かせていただいた。保護者の方の思いに胸を熱くした。

《絵本を選んだ理由より》

・絵本『ずーっと ずっとだいすきだよ』

飼っていた犬が死んでしまう悲しいお話ですが、生きていること、いのちについて少しでもわかってもらおうと思ったから。

・絵本『102 ひきのねずみ』

100 ぴきの子ねずみと親ねずみのお話。子ねずみが 1 ぴきだけ迷子になってしまい･･･。お父さんもお母さんもどんなことがあっても一人ひとりを大切に思っているということを伝えたくて。

＜考察＞

保護者が園の重点目標を理解して、読み聞かせ活動に参加してくれた。「いのちを大切にする心」をキーワードに絵本を選ぶことは難しいと言う声もあった。「いのち」ということにこだわりすぎず、優しさや思いやり、自分自身や友だち、家族を大切にする心につながるものも含めて考えてみてほしいと伝えた。これをきっかけに子どもが生まれたときの感動を思い出し、子どもの成長を感じることができたと話してくれた保護者もいた。どうしてこの絵本を選んだか、誰もがその思いを書いてくれた。私たち教師はその一人ひとりの真剣で温かな思いにふれることができた。教師の思いが伝わり、保護者の思いが教師に伝わり、保護者と教師の思いが子どもたちへと伝えられたのではないだろうか。

（２）大きな絵本（体験型）の読み聞かせ

絵本の画面が見ている人たちを囲んでしまうという画期的なお話の世界を体験した。この感動をたくさんの子どもたちや、保護者の方に体験してほしいと思った。「いのちを大切にする心」を育む読書活動につなげられたらと思った。

まず、この体験型の読みきかせに適しており、且つ「いのちを大切にする心」を育んでいける内容の絵本探しから始めた。たどりついた絵本は、『にじいろのさかな』（マーカス・フィスター作/谷川俊太郎訳）だった。素材を検討し、大きな大きな絵本作りが少しずつ進められていった。日常生活の中で職員が協力し合い作業を続けていったが、なかなかはかどらないのが現状であった。会議室を作業場として続きがすぐにできるように工夫した。すると図書館ボランティアの方がそれを目にして興味を示し、製作の協力を申し出てくれた。おかげでおよそ 20 メートルの絵本が約８カ月をかけて完成した。

（絵本作り：図書館ボランティアと職員）

学年ごとの保育参加日にこの絵本を読んだ。話が進むにつれて、聞いている親子を絵本の画面で包み込んでいった。子どもたちの目が輝いた。話が終わるとしばらくはお話の世界の余韻を楽しんでいた。画面の魚に話しかける子、まるで海の中にいるみたいと泳ぎだす子など様々な姿があった。たくさんの保護者から感動の声が寄せられた。

《保護者の感想》

「今回の体験を通して感じたことは、まず耳。園長先生の朗読の声に絵本の世界に誘われ、次は目。水色の背景から次々と色とりどりの魚や貝の海の中へ。主人公の魚が仲間とのかかわりで心が変化していくさまに共感し・・・。はっと気がつくとみんなが同じ海の中にいた。同じものをみんなで感じられたひとときでした。ありがとうございました。」

「製作のときからかかわらせていただき、ありがとうございました。とても素敵な絵本で、私も子どもの頃に体験したかったです。」

＜考察＞

体験型の絵本の読み聞かせを実現するまでの道のりは長かったが、そこに携わった者は達成感を味わうことができたのではないか。体験してくれた人の心に響き、「心を動かす体験」となったと思われる。この体験を通して非日常的な世界を一緒に味わい、そこにかかわった人の心が確かにつながったように感じられた。

小学生との交流会での読み聞かせより

（大きな大きな絵本の完成形）

Ⅳ　まとめ

１　いろいろな活動から育ったもの

○子どもたちが小動物に興味や関心をもつようになり、優しくなれた。
○子どもたちは、誰かのために自分ができることをする喜びを感じることができた。
○様々な活動の中で自己発揮ができ、自分のよさを認められ、自信をもつことができた。
○いろいろなお話に興味をもつようになってきている。
○感性が豊かになってきている。
○読書活動が小学校生活にもつながりをみせている。

２　育ち合っていること

○教師も保護者も読み聞かせをするときに「いのちを大切にする心」をキーワードに絵本を選んだことにより、意識が高まった。
○大切にしたい思いを保護者と共有することができたことで、子どもたちにしっかり伝えていくことができた。

３　これからもずっと大切にしたいもの

○優しい心
○思いやり
○自分自身や友だち、家族を大切にする心
○人と人とのつながり

「いのちを大切にする心を育む」を重点目標として、改めて園の環境を見つめ直した。生き物をなんとなく飼っていたようなところがあったことを反省した。教師が意識を変え、ちょっと工夫しただけで、こんなにも子どもたちは変わるのだということを実感した。

この重点目標を地域に発信すると、小動物を連れてきてくれた方がいた。マザーテレサや野口英世の話を年長児に聞かせてくれた方もいた。芸術鑑賞会では、女性グループの方々が「北風と太陽」のオペレッタを演じてくれ、「手のひらをたいように」をみんなで歌った。サッカーが得意な青年たちが子どもたちに体を動かして遊ぶ楽しさを伝えたいと来てくれた。高齢者のグループの方は、昔の遊びを教えに来てくれた。幼稚園が発信地となって保護者や地域の方の子どもたちへの思いがつながったのではないか。

地域の方たちとの交流では、子どもたちが一方的に教えてもらっているのではない。なぜなら、子どもたちとかかわったたくさんの方から「元気をもらった」「子どもたちから学ばせてもらった」という言葉をいただいている。そこに居合わせた人たちの心がお互いに動いているのである。しっかり目的意識をもち、伝えていくことでたくさんの人の心がつながっていくと感じた。人と人とのふれあいが人を育てるということを私たち教師は改めて学んだ。今後も人と人とのつながりを大切にし、子どもたちが自己肯定感をもてるようにはたらきかけ、子どもたちが心を動かす様々な体験を積み重ねられる環境を構成し、いのちを大切にする心を育んでいきたい。